『一人芝居・聞き語り　異説・津軽あいや節』

泥に咲くのが蓮の花

岡安伸治

――　開幕　――

本日はようこそおいで下さいました。誠にありがとうございます。

昔より津軽三つものといわれるものがございます。「じょんから節」と「よされ節」「おはら節」の三つ。

どんな踊りっこかひとつ「じょんから節」を踊ってみます。

この「津軽じょんから節」。この歌の起こりは慶長二年（一五九七）といいますから、今からざっと四〇〇年程前。ただ今の弘前より少し東、黒石は浅瀬石城主千徳政が、津軽藩主津軽為信にほろぼされまして後。嘘か真か、だれ歌うとなく十和田湖から流れる浅瀬石川、その上河原辺りで歌われたのがこの歌の起こりだそうでござりす。

「じょんから節」を歌い踊る。

これがじょんから節の手踊り。

今も昔も津軽富士、お岩木やまは津軽で生活する人にとっての守り神。

東北、青森県は弘前、お岩木やまの山裾、黒石に猿賀神社がございます。猿賀の池には古くから「さんぐ占い」というものがございまして。この占いと申しますのは、このような紙の上に昔はお米、今では一円硬貨を乗せまして水に浮かべます。そしてその沈む早さで願い事がかなうか、かなわないのかという占い方でございまして。すぐに沈むと願いがかない、いつまでも浮かんでて中々沈まないと願い事はかない難し。いつまでも浮いているようだとその願いは中々かなわないということで、これが霊感あらたかと言われて今でも続けられております。時にはいつまでも浮いてるものもございまして、嘘か眞かその中々沈まないそれに、この池におります小さな手長えびが時折よってまいりまして、はさみでこの紙をつかみまして願掛けしている人を応援するかのように水の底へ沈めてくれるという、なんともほほえましい話がございます。

今から四百年ほど前の昔。この猿賀にある女芸人がおりまして、芸人の名前をたまえと申します。

その芸人のたまえは猿賀神社の祭りの日、いつも池のほとりでむしろ一枚ひいて、その上で唄い踊り語っていたそうでございます。

先ほどお話いたしました津軽三つもの「じょんから節」と「よされ節」「おはら節」、この他にもう一つ。お祝いの席などでよく歌われます「あいや節」というのがございます。芸人、たまえの語っていた話というのがこの「あいや節」の起こり、あいや節がどうしてできたのかについてだったそうで。

このちいさなえびがなんでさんぐ占いの紙を引きずり込むようなことをするようになったのか、手長えびはなぜ手が長くなったのかという、その由来にからめて、たまえが語っていたそうです。

つい前口上が長くなりました。

では、まず女芸人のたまえについて語らせていただき、そのたまえが語って踊ったという「あいや節」のお話をさせていただきます。

この芸人のたまえは、ある日猿賀の池へ、突然消えてしまったということでございます。

消えたというのも変ですが、たまえの子供が語るには、消えるのを見たということで、それはこういうことのようでございます。たまえの子が大人になってから自分のおいたちをたぐりよせ、十数年ぶり生き別れになっていた母のたまえを猿賀神社の祭りの日に訪ねたそうで。

やっと会えたと母と子二人は抱き合ってそれはもう大変喜んだそうです。

そのたまえに、娘がこれまでのことをたずねると、涙ながらにそれまでのことを色々と語ったそうです。

貧しい雪の東北青森から、たまえのおとっつあんという人は今でいう出稼ぎに出たまま帰らず。風のうわさが

告げるにはどこかで女と一緒とか、まさかというような話。
そんなうわさの中、たまえまで流れの男の甘い言葉に乗せられて、手に手をとって母親を残して駆け落ちをしたそうな。
その夜は、さくら舞い散る弘前あたり、果ては都か極楽か。
しばしの夢は夢の夢、聞いて極楽、見て地獄。
それからはなんともひどい目にあったとか。男はなんとたまえを夜の家業で貢がせて、殴る蹴るの酷い仕打ち、挙句に誰の子やら身ごもりまして。
たまえは、昔思えど母は既にこの世になく、親子心中と思えど子を思えば死ぬに死ねずのただ涙。
あげく乳飲み子抱えて売り飛ばされて、あわれ宿場宿場を転々と、気づけばここは黒石猿賀の地。
あれからどれほど経ったやら。
秋の祭りに誘われて、子を連れ猿賀のお参りに、ここでばったり駆け落ち相手の男と会った。
又も、金を無心の催促に、夜の猿賀は粉雪まじり。しかも子供を売り飛ばそうと、ここで会ったが百年目。
金の代わりに石を入れ、石の入った金入れを男の前で投げ捨てる。
音を残して池の中、あわてて男が後を追い、池の縁を覗き込む。
腰ひも一つそっと引き、男の首に思いを込めて。一引き引いては母のため、二引き引いてはこの子の為。
恨みは猿賀の蓮の花。
「なにをしゃがる！　たまえ！……」
殺して男を池へと沈め。

子供の手を引いて逃れるはだしの峠に雪が舞う。
やっとの思いで峠越え。なんと着いた宿場で子には生き別れ。
「このくらいの子供を見ませんでしたか？どなたか子供の姿を見た方はいらっしゃいませんか！」
人買いにでもさらわれたのか、何の為の逃避行と血の涙。
「私の子供を…」
死のうと思ったその矢先、その身を瞽女に拾われて、手を引き引かれているうちに、いつの間にやら流しの芸人。
いつか年もすぎゆきて、いつぞや戻るは猿賀の地。
男を沈めた蓮の花咲乱れる池の淵。

なんと、たまえは男を殺して猿賀の池に沈めたということで、その罰が当たって娘と生き別れになってしまったのだと悔やみ、猿賀の池の淵で、供養の為にこのようなことをしてきたと語ったそうです。
二人が語りあった、その日の晩。
隣に寝ているはずのおっかさんのたまえがいないので、娘はあちらこちらと捜したそうで。やっとのことで探すと、たまえは猿賀の池にいたそうで、何をしているのかとそっと隠れてみていたそうです。
するとたまえは一枚のむしろを池に浮かべ。両の手合わせ
「どうか、娘が末永く幸せに暮らせますように」
といって願い事をして、池に浮かべたむしろに両膝を折って坐り、再び両の手を合わせた。

娘はあまりのことに口もきけずに見ていると、するとたまえの拝む姿、そのままそのむしろが、すーっと池の真ん中の方へ動いていったかと思うと、あっという間に、沈んでしまった。

「あっ！…」

夜、夜中あわてて土地の者に事情を話し、池の中を探したそうですが、おっかさんのたまえどころか何も出てこなかったということでございました。

すぐに沈むと願いがかない、ゆっくりいつまでも浮かんで沈まないと願いかない難し。

それではその芸人のたまえが、猿賀の池の淵で供養のために語っていた、あいや節のお話を。

天か分け目の大戦、大阪夏の陣がございましたのが元和元年、一六一五年。いまからざっと四百も前のこと。

「さあさあ、よっといで！　あいや節という唄と踊りがなして生まれたか、ご存知ない方はよっといで」

やれ津軽藩だ徳川様だと戦続きの乱世の世。ドサクサで儲ける者やら戦に敗れた人。戦に巻き込まれて家や家族を失った人、飢餓で土地を捨てた人などが、流れ流れて都から遠くはなれた、穏やかであったこの猿賀にも流れ込んで来た。

それは人だけじゃねえぞ。その一つが妖怪のあししばり（足縛り）という化け物だ。この妖怪、元はなんでも京都（みやこ）に住んでいた美しい娘であったとか。

「あれ、深泥池からきれいな笛の音が」

美しい娘ゆえに深泥池の大蛇にみそめられ

「これ、そこのおなご、どこへまいる？」

大蛇の透き通るような青い目でじっとみつめられちゃ、甘い言葉におなごの力ではどうにもならね。それから夜な夜な通いあれよあれよと言う間に、なんと、心ならずも子供まで身ごもってしまった。ところが大蛇と契ったということで

「聞いたか聞いたか？」

「おお。何でも深泥池のへびとできているって話じゃねえか」

「あそこを歩いているのがその女だよ」

「かぁー、なんとも気をそそるようないい女だね」

「目を合わせるな、身ごもっているって話だから何されるか」

「くわばら、くわばら」

京都中の巷のうわさは千里を走る。汚らわしいとみやこの人らに拒まれ、挙句親から都を追い出され、そのうらみつらみで、なんと人間を深泥池（みどろがいけ）の水の底へ引きずり込む、あししばりという妖怪に姿をかえてしまったと。

それからというもの、何人もの都人が行方不明になってしまい、都の夜は誰も歩けなくなってしまった。こまった都じゃ、そこで深泥池の大蛇を退治するために、若い有能な坊様が選ばれ使わされることとった。

「えっ！　わ、わ、私がでございますか？　よ、妖怪退治？　わ、私が？」

坊様が呪文を唱える。

「人間どもがこしゃくなことを！　苦しい、おのれ！」

若い坊様の唱える呪文で、深泥池の大蛇は退治され、妖怪のあしばりは追われて、逃げて京都の神泉苑の池へ入ろうとした。んでも、そこの主の竜神が

「神泉苑の池は竜神の住む所と知ってのことか？　身の程しらずのげすが！」

ここでも竜神と闘いに破れ、津軽のここさ、猿賀へと流れつき、池の底に身を隠くしたんだ。

この、あししばりの逃れてきた猿賀の池のほとりの村に、ちよとおっかさんがすんでおった。ちよのおとっあんは戦にとられ、しじみを取ったり、やなで魚を取って母子二人きりで貧しくとも楽しくくらしていた。

娘のちよは

「いい天気だねす。れんこんいらねがー、さるがのうめえれんこん

いらねがー」

このちよという娘は、歌や踊りが大変好きなおなごで、いつも楽しそうに池に入って蓮根取りの仕事などをして、働きもんだ。（りんご節）

そんである時、その歌に聞きほれてちいさなえびが跳ねた拍子に、蓮の葉の上に乗ってしまった。

「あれっ、なんと馬鹿だ。おーい！　だれか助けてけろー　くそっ！　またしてもスルスルスル。はすの葉、なしておめえさんは意地悪すんだば！」

すると蓮の葉が

「おめが亀やなまずにいいとこ見せようとして。水面をピョンピョンはねたんだべさ。三尺もある大きなはすの葉は、おらの一番の自慢のものよ。そこへ飛び込むおめが自分でまねいた身の不幸。弁天様のつくられる風が吹くまで待つこったな」

「でも、岩木のお山さお出かけで弁天様は留守じゃ。そうこうしていると葉っぱの真ん中にたまっているわんずかばかりの水もおてんとう様の熱で干し上がってまって、おらはカラカラの日ぼしで命も枯れる」

傘を逆さにしたような大きな蓮の葉の上でピョンピョン飛び跳ねるけど、水滴が葉の真ん中に集まるように、どうしてもそこから逃れることができねえ。

疲れはてて風に揺れる葉の上で、これでおいらの一生もお終いかと覚悟しかけた。ちょうどその時、歌を唄いながらが仕事をしていたちよがこれに気づいて。

「あらー、きれいな蓮の花、今年もよぐ咲いだねし。蕾もいい色してら。大きな葉っぱのおかげだの。これはまあ、蓮の葉の中でえびさんひなたぼっこでござりすが？　へばこうやって葉を傾けて」

ちよが、葉の上からそっと水の中へ逃がしてくれた。ありがてえ。
この時から、えびはちよに惚れてしまった。磯の鮑でなく、池のえびの片思いってか。
大変だ、それからというもの。このえびさまはちよが池に入ってくるたびに、その素足にさっと自分の体を擦り付けたりしてよ。まあ、なんとも、いじらしい。

でよ、そんなある日。みやこから妖怪を追ってやってきた若い坊様が、何やら気配を感じてこの池に立ち寄り、ちよに出会い。
「あ、あ、あの、おお、おたずね申します。お岩木やまへの道は、こちら、ああ、いやここを行けば、よよよろしいのでありましょうか？　じじじ実は、お岩木山に呼ばれて急いでまいるところ、なにやらこのこのこの、池の方角に気になるけ気配がここいらに、ということで、ここここちらにまいりましたが、道に迷い、ました。はい」
なんだってよ、この時、坊様はまだ若い青い。「女性とどう接するのか」という修行のコースのライセンスをまだ取ってなかった。んで、ちよに一目で恋してしまった。ああ…
んだとも、坊様とてこれ人間、ほれてなぜ悪い。でしょう。
そんなこんながありますと、池の底に住みついた妖怪あししばりがおりますので、えびさんは心配で、ちよがあししばりに引きずり込まれるのではないかと、尋ねたんだこれが。
すると妖怪のあししばり
「ふん、ちよとかいう娘のこと？　今の内は安心していいよ。私の大好物はなんだか知ってるかい？　人間の心。それも人をねたんだりうらやんだり、嘘をついたりだましたりする汚い裏側の心。人間の心はね、色々なも

のが詰まってて、それが何かの拍子に目を覚ますのさ。すると自分でも思ってもみなかったことをするんだ。それが人間の心と言うものだよ。（笑う）ちよに手を出したらそのはさみで掛かってくるってか（笑う）」なんとも、きたない人間の心が好物なんだと語った。

まだまだ、他にも。先程の坊様の他、色々な人間が都から流れ込んできたその中に、遊び人の若い男がおりまして。その名を半助。見た目いい男だこれが。

元は百姓の身でよ。戦に狩りだされてあっちこっちと逃げ回り。そのうち身を持ち崩し、やくざのはしくれのような世界で生き延びてきた人間だ。口先三寸の世渡り上手。次々と女をだまして、金せびり。遊びほうけてのその日暮らし。あげくは女を売り飛ばす。この半助が、あっちでだめならこちらがあるさとばかり、借金が嵩むと踏み倒して逃げ回る。この半助が「れんこん、いらねがー」蓮根売りのちよに目をつけた。

この半助、ある日やくざに取り囲まれて

「なんだなんだなんだ！　この俺を、加賀の半助と知ってやろってのか！　博打の借金ぐらいのことで大袈裟なことすんじゃねえや！（ぶっ飛んだ）待って、待ってくれ！　返すよ返すっていってるじゃねえか！　兄さん方。待ってくれ頼む！　このとおりだ後生だから、おれはよ、こう見えても国じゃ米問屋の大店の伜なんだ。二言はない二言はない、手紙の一本でよ、金なんかすぐ送ってくれるんだ。それがもうおっつけ着くころなんだよ！（またもぶっ飛んだ）分かった！　なんとかなんとかするよ！　一人心当たりがいるんだ、そいつが売れれば、頼む待ってくれ。後生だ！」

まあなんと、若い坊様と半助とちよ、ちょっとした三角関係。
そのころ妖怪退治の坊様は（呪文）、まだまだ修行の身、おなごを好きになってはいけない、いけないといいながら、恋焦がれて山の祠で悶々とした日々を、すごしておりました。
（呪文）
迷う心に迷わす心。
半助が言い寄り、千代の周りをうろつく。当然、村人らの噂がちよのおっかさんの耳にも入る。
ちよのおっかさんが心配し、心配すればするほどちよは半助に引かれていく。世の常だ。
「ちよ、村の人らが色々といっているようだけど…」
昔も今も、女と男はいつの世も同じ。
これはおっかさん同様、えびさまとて気が気でない。えびを勘定にいれると四角関係。
えびはえびで
「この頃、ちよさんはおっかさんに嘘ついて若い男と、何んだか心配だ。なにもなければいいが…」
するとよ、あしばりが
「目当てはかねだ。この間、あいつは水の中に手を入れた。するとあの男の考えが分かった。女たらしの食わせ者。女を丸め込んでは貢がせ、後は人買いにでも売り飛ばす。金さえあれば他の人間が頭を下げてくれる。だれでも自分が一番大事。人間はね自分では賢いと思っている。が、誰でも己の中の醜いものをはすの花の蕾のように包み隠していてね、金という風が蕾に当たると。春の風と間違えて皆開いてしまう。若い者は男でも女でも、誰でも皆。生まれ育った所に退屈してる。あれも見たいこれも見たい、あれも着たいこれも食べたい。若い男は

若いおなごが欲しいてたまらん、若いおなごは若い男が同じように欲しいてたまらん。このままにしておきな。半助のことだ、ちよの仕事を手伝うようなふりをしてこの大池の中にザブザブと入って来るに違いないさ。そうすれば、久々に引きずり込む相手ができる。おまえは恋敵がいなくなり、泥の中に沈めた栄養分ではすは立派な花が咲けば、また人間も集まってきて、ここの大池も大賑わいということだ。めでたしめでたし…」

半助、バクチの借金取立ての約束、ぎりぎり期限のその日。

ちよと待ち合わせ、池に来るのをじっと待っております。

その時半助、ふっと池に目をやるときれいな蓮の花。それも大きさも色も色々。

そこで半助考える。かわいいちいさな蓮の花をちよの髪にさし、口説きのきっかけを思いつくと

裾をたくし上げて池の中へ。

「ザブ…ザブ…ザブ…」

一歩二歩と入って、花にもう少しというところで、待ち構えていたあししばりに足を絡み取られた。

「あれっ！　…あれっ？　足が抜けねえ？　なんとしても足が抜けねえ。それっ！　抜けない！　誰か助けてくれー、おい！　ちよさん、助けて。足が足が抜けない！　ちよ、早く助けてくれ！ー　ウワ！ー　沈んでしまう。ちよ！ー」

えびは、半助の奴、罰が当たった好い気味だと小躍りして見ておった。

そこへ丁度ちよが来て、半助の悲鳴を聞くとその姿を見つけ、半助の名を呼んで助けようと池の中に入っていく。

「半助さーん！　半助さん！　おらの手さつかまって、おらの手さ！　もっと伸ばして！　誰か助けて、誰か来て！　半助さんが沈んでまる、誰か！ー」

ちよのその姿に、えびが。

「くるんでね。こったらだ男ほっておけばいい。ほっとけばいいんだこった奴！　なしてこっだら男の手だの！　やい、半助！　ちよさんの手ば離せ！　このハサミで、おい離せ！　あししばり、待て！　ちよさんまで引きずり込んでまればまいね。離せ！　まいねちよさん！　この男の手ば離さねば、一緒に沈んでまる離せ、ちよさん！　ちよさんも一緒に沈んでしまう！　おい、はすの葉なんとかしろ。なんとか！」

はすの葉「おら、動けねえ」

半助はちよにしがみつき、ちよはしっかり半助を抱えて引き上げようとする。

えびはちよを離せと半助の手にはさみで切りつける。しかし、はさみの手が短くてなかなかうまくいかない。

半助とちよ、二人ともあししばりに水の底へぐいぐいと引き込まれていく。

「ちよさん！　助けてくれ！」

「半助さん！」

えびはあししばりに飛びかかる。

なんとなんと、神泉苑の竜神と闘ったほどの妖怪、小さなえび如きがかなうはずもない。

「ふん！　青二才のわっぱのくせに。面白い、それで私に勝てるか。勝てると思ったらせいぜいやってみるこったね！（笑う）」

あししばりはくねりゆねりと身体中をくねらせて、ますます半助にからみつく。えびが切りかかる。

「はなせ！　はなせ！」
「子供のためにもたらふく食べてないとね」とあししばりはますます絡みつく。
二人がしっかりしがみついているので、えびのはさみが短くて届かない。
そこへ坊様が、ちよを一目見たさに山を下りてきて、池の騒ぎを聞きつける。
あわててほとりで妖怪退治の呪文を唱える坊様。（呪文）がしかし、なんと坊様の心の迷いで呪文は全くの役立たず。
「あれー？　あれー？」
そのうち黒い雲と雷が鳴ったかと思うと、大きく風が吹き荒れ竜巻が巻き起こり、池の底が大きく広がり、ちよの
「半助さーん！」
という声を残して、二人はあっと言う間に水の底へ消えてしまった。

えびは悔しがって、蓮の葉に言った。
「何でこころのきれいなちよさんまで、引きずり込まれた。なぜた！」
すると蓮の葉が
「本当にちよは心が綺麗であったか？　半助の手ば握った時、本当は自分は騙されるかもわがらねえと知っていたのではねえが？　駆け引きをする心があった。自分ではこんな土地から一人で離れられない、半助を利用しようと…　夢は男と都へ…。半助の心の中の何かが、ちよさんの心の中の何かと結びついて。したはんであししば

りの力に二人とも引きずり込まれてしまったんだ、二人とも」
てながえびは「嘘だ！　そりゃあ一瞬のことではねえが。」
はすは「んだ、たかが一瞬のことだ。ひょっとして、半助が池の中でふざけているとは考えねがったか。ちよも騙された振りばして入ってきた。蓮の花の中で抱き合う姿ば思い描いだんでねがったべか」

全く、この人の世で、分かっているようで、わからないのが男と女。
えびはくやしくて悲しくて、幾日も泣き続けた。「あししばりを信じたばっかりに」
お岩木やまの神様が、このえびの姿に深く心を動かされ、この池で二度とこのようなことが起こらぬようにと、えびの手を長くして下された。手長えびの手は、こうしてながくなったんだと。
それからといもの、手の長くなったえびは、それを振り回して、あししばりを夜となく昼となくおいかけまわしたそうな。あの坊様はちよを思うあまり、鵜という黒い鳥になって、あししばりをくわえると岩木のお山に閉じ込めたそうだ。あししばりは、今でもお岩木山の神社の側さ閉じ込められているんだそうだ。鵜という、黒い鳥に姿を変えてしまった坊さまは、それからというものぼんのう（煩悩）がどうとかいって、悩んで落ち込んでよ、今でも水辺で、水の底に沈んだちよさんを追い求めて、ちよにすまないと水の中をじっと見つめて、修行を続けているんだそうだ。
その上、お岩木やまの神様が、池では聞くことができなくなった、ちよの歌の変わりに、蓮の花が咲く時に鼓の音のような「ポン」という音まで出してくださるようになりましたそうな。

さて、かわいそうなのは一人娘を失った、残ったちよのおかさまでございます。

「ちよの草履？　…ちよー！…」

親にとって子は幾つになっても子供。自分も一度は年頃の若い娘だったことだの、忘れたがるものです親とは。大事大事で、大事が壊してしまうものもある。これでおっかさんの生きてきた証が消えた。

その日より、村から姿を消したそうで。

それからのち、人のうわさで、あっちこっちの村の辻々で、きたない身なりをしたちよのおっかさんらしいおなごが、娘の供養といって、唄い踊る姿を見たという人が現れましての。

「娘のちよのために、弁天様を作ります。なにとぞ心づけで結構でございますなにとぞ、ご喜捨を…　ありがとうございます。へば、踊りこば」

今宵　めでたい　花嫁　姿

親も　みとれて　それもよいや　嬉し泣き

こうして、ちよのおっかさまが、娘を思って作ったという歌と踊りが、「あいや節」でござす。

「津軽　あいや節」を歌い踊る。

♪ 今宵　めでたい　　アイヤーナー　アイヤー
花嫁　姿
親も　みとれて
それも　よいや
嬉し泣き

唄が　流れる　　アイヤーナー　アイヤー
津軽の　唄が
よされ　じょんがら
それも　よいや
あいや節

んで、願い事がかなわなかったえびさまは、願い事がかないますようにと人助け、さんぐ占いの紙を引きずり込むようになったんだとさ。

んだから、きっとたまえさんは、娘の幸せさ願った後、えびさまに引っ張り込まれて、蓮の花になったのかも

しれねえな。
すぐに沈むと願いがかない、ゆっくりいつまでも沈まないと、願いかない難し。
これが、芸人たまえの「聞き語り　異説・津軽あいや節」の一説でございました。お粗末さまでございました。
本日はありがとうございました。

――――　幕　――――

※　本戯曲の無断上演を禁じます。
※　テナガエビ「体長約九センチ、本州以南の比較的低地にある湖沼、河川に多産する。淡褐色。雄の第二歩脚は体よりも長く、先端は鋏となる」

（一）上演記録
初演　二〇〇〇年十二月二三・二四日　下北沢　本田スタジオ
改稿版　二〇〇四年八月七・八日　喜多方　大和川酒造北方風土館

【キャスト】
演者　日野原　きみ

【スタッフ】

作・演出　岡安　伸治
舞台美術　坂本　真彩
音楽　曲尾　友克
音響効果　曲尾　友克
衣装　坂本　真彩
民舞指導　二村　説子
制作　二村　説子